る模型にはちゃんと表現されていました。とはいえ、こんなことも『東京城』を読んでいただけではけっしてわからないこと。あらためて現地で実物に接することの重要さを感じた次第です。

（文化遺産研究部　小野健吉）

研究室紹介

飛鳥藤原宮跡発掘調査部　考古第一調査室

飛鳥藤原宮跡発掘調査部には考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室、史料調査室が置かれています。考古第一調査室は土器等の遺物の調査研究を担当し、考古第二調査室は瓦・金属器・木器等の遺物を扱うと定められています。しかし当調査部は平城宮跡発掘調査部より組織が小さく、発掘調査で出土する多様で膨大な量の遺物の整理には、組織図どおりの分業では不適合な部分があります。そのため、遺物については瓦・土器・木器（瓦と土器以外を扱う）の３つの整理班を編成して作業を進めています。考古第一調査室の対象とされている土器類は、土器整理班を中心に整理・分析・研究をおこなっています。

日常的な作業は、現場から運ばれてくる土器の水洗、分類、破片の接合と復原、実測、データ処理などの基本作業が中心です。現在は主に吉備池廃寺と飛鳥池遺跡の報告書刊行にむけて、整理作業や実測図作成などをおこなっており、いそがしい毎日が続いています。

飛鳥藤原地域は、７世紀の約１世紀のあいだ日本の都でした。この地域から出土する様々な遺物は、律令国家の成立過程を明らかにしていく重要な資料です。土器もそのうちの主要なものの一つで、どんな遺跡でも必ず出てくる普遍的な遺物です。土師器・須恵器を中心として、７世紀にこの地域で使われた土器の様相を明らかにしていくことが研究課題です。土器の編年や作られた産地の問題など、課題はたくさんあります。また宮都で使われていた土器という性格から、全国各地の同時代の土器研究への関わりは大きいと考えられます。７世紀の土器様相の基本的な変遷についてはこれまでにも『学報』などで公表してきましたが、今後さらに詳細な研究成果をあげていくよう努力しているところです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　安田龍太郎）

平城宮跡第一次大極殿復原工事

第一次大極殿正殿復原工事は、2001年度までに、大極殿基壇基礎造成（1,795㎡）、木材の調達、基壇化粧石材の調達、工事用地の仮設盛土（53,150㎡）、仮囲いおよび進入口の設置、木材保管庫（1,505㎡）・木材加工場（1,505㎡）・加工原寸場（2,005㎡）・一般公開施設（720㎡）などの仮設物の建設等が発注されています。

大極殿基壇は鉄筋コンクリート躯体に凝灰岩切石の貼り付けを行うもので、平城宮跡でも出土している兵庫県高砂市宝殿産の黄色凝灰岩「黄竜山石（キタツヤマイシ）」を使用します。また、基壇基礎に使用するコンクリートは、乾燥収縮低減剤を添加した通称「五百年コンクリート」を使用しています。

2002年度は、大極殿基壇基礎内に免震装置の設置工事および木材調達、柱礎石の据え付けなどが契約されており、近く素屋根建設工事の発注が予定されています。また、９月から、基壇の化粧石材の加工貼り付けが始まりました。

（平城宮跡発掘調査部　渡邉康史）

大極殿基壇の地覆石

博物館学実習生の受け入れ

一昨年度からおこなっている博物館学実習生の受け入れも３年目をむかえました。今年度は９月２日から６日までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。実習生は帝塚山大学から６名、奈良女子大学から２名、京都橘女子大学、東京農業大学、専修大学、徳島文理大学、大阪明浄大学から各１名の計13名と、昨年度の８名に比べるとかなり増加しています。また、学生の専門も文化財だけではなく、日本文化や造園というように多岐にわたっています。